

<目次>

- 大変だったけど充実 第42回(2022年)児童図書館員養成専門講座を終えて
島 弘
- IFLA(国際図書館連盟)児童ヤングアダルト図書館分科会ニュース
護得久えみ子
- お知らせ 児童青少年委員会オンラインセミナー
- 新石川県立図書館子ども室訪問記 2022.10.31
川上博幸



大変だったけど充実

第42回(2022年)児童図書館員養成専門講座を終えて

児童青少年委員会委員長 島 弘

<はじめに>

第42回(2022年)児童図書館員養成専門講座が10月上旬に終了しました。この講座は、前期6日間、後期9日間の合計15日間で、児童サービスに特化した研修です。講座の構成は、「児童サービスの総論」が2日間、「児童サービスの実際」が7.5日間、「児童資料について」が3日間でした。また、「特論」として児童書の編集、脳科学からみた読書の重要性についてを編集者や研究者からお話して頂きました。ここでは、参加者15人が語った講座の感想をもとに内容を紹介したいと思います。

<ストーリーテリングなどの演習>

児童サービスの実際では、ストーリーテリングやブックトーク、乳幼児おはなし会などを行いました。

現場で経験のある人だけでなく、はじめて挑戦したという人もたくさんいました。受講者は準備で大変だったと思いますが、自館でやる機会があまりなかったので良い経験になった、ストーリーテリングの楽しさを実感したなどの感想が寄せられました。

<事前の課題が多い>

この講座は、事前の課題が多いのが特徴です。講師の話聞くだけでなく、事前に課題を行うことで、より充実した内容にしようと考えているからです。受講者は大変だったと思いますが、その壁を乗り越えたとき、今まで見えなかったものが見えてくることがあります。課題を通して、自館を見直せた、いろいろな問題に向き合えたという感想が寄せられました。

<みんなが集まること>

この講座は、全国から集まった図書館員が対面で参加する形です。理由の一つは、演習が多いということです。児童サービスにとってストーリーテリングやブックトークなどの技術を身につけることは大切なことです。また、選書でもグループになり討議を重ねることが必要です。そのためには、同じ空間と時間を共有することが有効です。

全国から図書館員が集まるということは、自然と受講者間の交流の機会にもなります。全国的に様々な課題があることが分かった、全国の仲間と悩みや問題を共有することができた、勤務する自治体しか見えていなかったのも、いろいろな気づきがあったなど、感想が寄せられました。

コロナ禍のなかで、委員会としても対応に苦慮することが多くなりましたが、対面をベースにすることでより充実した講座になると考えています。受講者からも、リモートによる研修が増えるなか、対面で開催したことに感謝しているとの言葉ももらいました。もちろん、この形は、一長一短があり、全国どこからでも参加できるリモート方式による講座のメリットもあり、難しい選択であると考えています。

<さいごに>

この講座は、大変だけれど持って帰るものも多いと評価を頂いています。児童サービスをもっと知りたい、自館の児童サービスを充実させたいと思っている図書館員の参加をお待ちしています。2023年度の開催については、図書館雑誌2月号でお知らせする予定です。

最後になりますが、この講座は経験豊かな図書館員、専門家の方々に講師として登壇して頂いています。感謝を申し上げます。



IFLA(国際図書館連盟) 児童ヤングアダルト図書館分科会ニュース

ガイドラインのポスターを作成

IFLA 担当委員 護得久えみ子(東京子ども図書館)

IFLA(国際図書館連盟) 児童ヤングアダルト図書館分科会は、2022年5月に IFLA Guidelines

for Library Services to Children aged 0-18 のポスターを発行しました。これは、2018 年に同分科会が刊行した改訂版ガイドライン*の短縮版にあたるものです。

(*:日本語版は『IFLA 児童図書館サービスのためのガイドライン0歳から 18 歳 改訂版』として 2020 年3月に日本図書館協会から刊行)

元となるガイドラインの柱だてに沿って「パート A 児童図書館の使命と目的」「パート C 資料構築と管理」など、7つのパートそれぞれについて、情報が凝縮され、視覚化されています。図書館計画について行政や関係者と話し合う際の要点整理の手掛りとして、あるいは、図書館に掲示して、子どもたちの情報リテラシー、読書に対するニーズと権利を、喚起するものとしての活用を企図して作成しました。各国語版への翻訳も進められるよう、現在調整中です。

ポスターやガイドラインは、下記の URL からダウンロードできます。

英文ポスター:<https://repository.ifla.org/handle/123456789/1927>

英文ガイドライン:<https://repository.ifla.org/handle/123456789/171>

日本語版ガイドライン:<https://repository.ifla.org/handle/123456789/242>



お知らせ 児童青少年委員会オンラインセミナー

「これからの公共図書館の YA サービスを考える」

YA (ヤングアダルト) は「読まない」のではなく、いろいろな理由から「読めない」のではないのでしょうか。サードプレイスとしての図書館の役割、この世代に馴染みのある電子媒体の提供について、既に取り組んでいる自治体の事例発表も行います。これからの YA サービスについて、一緒に考えましょう。

日時：2023 年 2 月 13 日(月)19:30-21:00

開催形式：Zoom によるオンライン開催

内容：

1. 講演「YA 世代の読書実態～発達段階や特性に応じた読書活動の支援について～」(清野愛子：相模原市立図書館)
2. 事例発表「都城市立図書館の YA サービス」(服部紗香：都城市立図書館)
3. 事例発表「相模原市立図書館の電子書籍サービス」(岩永知子：相模原市立図書館)

定員：80 名 (先着順)

申込方法：下記申込フォームで必要事項を入力の上、お申し込みください。

<https://forms.gle/osFZU2pf9ydoKDjm7>

受付開始：12月25日(日)

申込締切：1月31日(火)

Zoom 接続先等、詳細については、2月6日(月)を目安にメールでお知らせします。2月6日(月)を過ぎても連絡がない場合は、下記の間合先にご連絡ください。また、jidou@jla.or.jpからのメールを受信できるように設定してください。

間合先：児童青少年委員会事務局 (☎03-3523-0811 E-mail：jidou@jla.or.jp)



新石川県立図書館子ども室訪問記 2022.10.31.

児童青少年委員会委員 川上博幸

うしろで何か気配があった。振り返ると女の子がいた。こどもエリアで私は長く検索機を使っていた。「代ってほしいんです」と。代ると慣れた手つきでキーボードを操作、1冊検索して印字用紙を取り出す。調べていたのはシリーズの1冊だった。あまりの手際よい手つきにびっくり、尋ねると小学校2年生だという。いつもこうして探しているとのこと。検索の仕方を誰に教わったのか聞くと、意外にも「あそこの店員さんにきいた」と。この子はこの部屋で働く、委託の女性職員を図書館員と思っていないのか。それとも図書館員という言葉を知らないのか…。

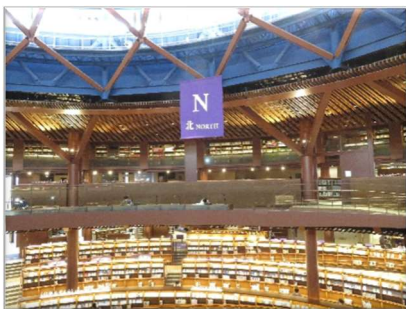


写真 1

1. 新石川県立図書館全体像

新石川県立図書館は約10か月の休館後、2022年7月16日(土)に、金沢市本多町の市街地から小立野町の郊外へ移転して新築開館した。JR金沢駅からバスで約30分。1時間に2本バス便がある。すでにテレビニュースや新聞報道などがあり、巨大で斬新な建物の特徴や見どころが紹介されている。秋田県の国際大学付属図書館と同じ円形大伽藍の開架空間だ。1階から3階は、各フロアを4区分、全体を12区分と4階回廊で構成(写真1・2)。3階が検索・貴重資料、視聴覚関係、橋(開架全体が俯瞰できる)(写真3)、2階は総合窓口、企画展示、研究室、学習室、1階は子どもエリア、食文化体験スペース、屋外広場などである。入口のブックリウムはプラネタリウム似の立体空間で、本の表紙が大量に



写真 2



写真3

球群となって回転。用意された特定の用語から、関連本が中に浮かぶ、そんな部屋である。来館者への挨拶としては効果的だ。

私は、この図書館が移転開館してまだ1か月ほどの、2022年8月の2日間の午前、午後訪れた。これまで見た図書館の中で、施設面で最も素敵な図書館である。ひと言評価、この図書館行政は、新たな可能性があるのは確かだが、運営面で、利用者が利用しにくくなった点

できたと感じた。総じて、可能性は大いに3歩進んだが、1歩後退もしたと感じた。

施設・設備面で非常に優れた、この巨大な図書館の、多くの諸要素を一度に伝えることは難しい。概略を説明後、利用者の立場で、主にこどもエリアとその様子についてお伝えする。

公立図書館は雰囲気や居心地の良さが好まれるようになった。図書館は施設、資料、運営、活動、予算、人が重要な要素である。旧石川県立図書館からは、雰囲気も居心地も良くなったのは紛れもない。面積、施設、開架空間、資料、運営などの面で立派になった。

建物に入ると回廊になっていて、外側からも入れる部屋が半円型に並ぶ。内の開架を覗くと、ガラス越しに扇状系の「だんだん広場1～2階」が見える。このだんだん広場のような設備はすでに例があり、階段に腰かけて、絵本を読み聞かせるのも、おしゃべりをするのも自由で、寛ぐことができる。

次に開架室への入り口を入ると4階まで見渡せる。壮大な光景で、初来館者の多くが感激していた。各階、壁に沿って回廊が一周する。2階には反対側へ広い橋が架っている。この橋には「生命進化」のパネル解説と関連図書の平面展示がある。この解説や図書の展示には恐竜学者真鍋真氏が関わられ、優れたものである。回廊側に、登録、レファレンスなどの窓口カウンター、事務室などがある。3階、4階と回廊は短くなる。壁面に書架と、所々に窓と個人用の机（照明、電源付）がある。開架は30万冊で、そのうち3万冊が、各所に12区分された主題・テーマ開架である。この「本の円形劇場」部分は、ウェブページなどの解説でどうぞ。

2. こどもエリア全体

1階面積の約4分の1弱の空間である「こどもエリア」について、お伝えする。

ガラス壁に囲まれた室（400㎡くらい）には、絵本、読物、知識コーナー、子どもの読書サポートルーム（児童書研究・新刊全点購入書・13歳の本棚、事務、窓口）、その奥に、ミーティングスペース（紙芝居、ビッグブック）、「本と出会う12のテーマ」の一つ「子どもを育てる」コーナー（食事可）、遊具コーナー、体験スペース、おちつきへのや（狭い）、バリアフリートイレなどがある。庭（おはなしの森）へ出ることもできる。

3. 児童書の蔵書について

開架の蔵書構成は、都府県立図書館指向ではなく市町図書館指向と見えた。書架は、約半分以上がカーブ書架である。書庫は別にある。書架の間に丸く空間があって、子どもが一人入り込める。そこで小学校高学年くらいの女の子が2時間あまりで10冊ほど本を読んでいた。開架の本は多数が貸出中だが、軽読書作品が目立つ。早計な判断はさけても、読み



写真 4

継がれた継続本を選びすぐって配架したか不明である。新書版は岩波少年文庫・福音館文庫を販売シリーズごとを一括配架し、他は個別配架している。青い鳥文庫は、大型活字本だけを販売シリーズごとを一括配架しているようだ。角川つばさ文庫は個別配架だ。ほかにも判型、体裁を揃えた販売シリーズを一括配架している例がいくつかあり、分類配架も同じ傾向である。4連単位の書架が島のように配置されているので、分類の流れが細分されて、全体の統一感を欠く。

開架されている主題図書は以前より格段に増えたが、市立図書館程度の量で、調べるための机がなく、ここでの調べ学習支援は、考慮にない(写真4)。こどもエリアは、昨今の“避重就軽”の影響を受けて、利用を重視する市町図書館指向に近い。個々の本との出会いを重視するなら、個別の分類が適切だが、その配慮は十分ではない。



写真 5

おはなし絵本は画家順配架。半円形敷物区画(下足)の書架両面(むかしばなし、のりもの、よみつがれた絵本、ほかビッグブック)と隣接して、そこに遊具、遊具の下が2段本棚。はじめての絵本コーナーには、はじめての絵本、タペストリー、布絵本があり、別所に子ども読書コーナーに、しかけ絵本がある。(写真5)

4. 大型遊具



図 6

これまでの図書館にはない大掛かりな遊具施設がある。3m程の階段塔2つの間に、曲がりくねった綱網の橋が架けてある(写真6・7)。その間をアスレチックのように歩き走り回れる。幼児対象だが、小学校中学年もいる。2歳くらいから‘はいはい’のようにして塔の階段を上り楽しめる。

揺れて歩きにくい橋網を走って渡る子、歩いて渡ろうとする子、ひろい横に倒れて楽しむ子など、大声でキャーキャー動き回っている。児童室の声は外には出ないが、子ども室内には響き渡る。2歳そこそこの子は、まだ怖いので



図 7

ひとりでは入らないが、2歳半になるともう自分で入る。怖がる幼児を母親が一緒に行こうと誘う。図書館の「と」も知らない子が、遊びで図書館の子ども室に慣れ親しむことをどうとらえるか。単純にあんなに心底楽しんでいるのだからというのはたやすい。幼児の楽しみの場だと認識していけば、後の利用に期待ができる、いろいろ受け止めはできるが、難しい。

現在、簡単な遊具で遊べる図書館もあまりない。こんなに大がかりに子どもが我を忘れて遊ぶ図書館は皆無ではないか、あっても極めて少ないと推察する。見ていて実に楽しいが、経験の蓄積も全くない。幼児の怪我や事故はと管理主義者の意見はすぐに思いつく。トランポリンのようなものを設置した図書館はあったが、開館後すぐに使用不可になった。この先も見えている思いがしたが…。

他に、影踏みのように、床に投影した海中画面（他種の仮想ワールドもある）に、次々出現する魚や生きものを踏みつける遊びがある。台形の広い段の上には、吊るした「ハンギングエッグチェア」があり、回して！と周りの人や親にせがむ幼児たちがいて賑やかだ

った。このハンギングチェアは一般スペースにも複数あった。階段下を使って子どもが入り込める隙間を造ったり、静かにしていたい子のために、数人しか入れない「おちつきのへや」があったりする。先の遊具の回りの裾2段が円形書架で、絵本を配架してある(写真8)。かがまねばならず、小学校高学年の子どもは探しにくい。

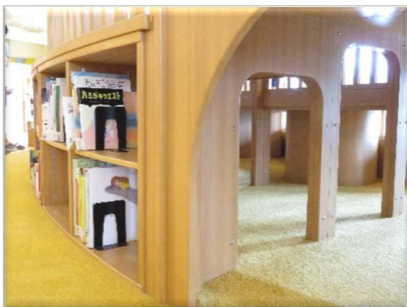


写真 8

このような「こどもエリア」である。全体が、設計段階で備品配置を決めたので、児童書全体の区分別配

架に、相当の苦心があったと思われる。

5. AIで絵本を探す

「AIで絵本を探す」端末機に初めて出会った。用語の組み合わせで条件を満たす絵本情報がリストアップされるというものである。キーボードの配列が日本語、英文字共に、一般的排列ではない。解説用紙を見ても使い方がよくわからない。初めに用意された、いくつかの用語やその組み合わせでは、なんとかなる場合もあった。例えば、「さる×ぼうし」と入力すると『おさるとぼうしうり』が出てきた。10タイトルほど挑戦したが、めざす絵本が出てきたのは、この一例だけだ。準備した用語数が少ない。その利用は、すぐや

める人ばかり。男子中学生も10分ほどで使い方がわからないとやめた。係の人に教えてもらえるよと伝えたが、彼は尋ねなかった。代わりに私が尋ねてみたが、委託の職員はマニュアルをみても使いこなせず、説明もできなかった。開館日が先に決まっておき、訓練が間に合わなかったのだろう。

5. 新しい図書館利用

冒頭の女の子は人気シリーズの本を、他の子が借りるのを気にして急いでいた。「代ってもらってありがとうございます」と丁寧に挨拶して駆けていった。その丁寧な挨拶にも驚いたが、開館してまだまもない、開架の本は開館後かなり借りられて、書架は本が減っている。だから急いでいたのだ。9時に開館して1時間ほど、平日だが夏休み、人が多くなりかけていた。これまでこのように長けた小学生の女子に出会ったことがなかった。

それもそのはず、一般室で本のことを尋ねたら、まず自分で検索するよう促されると、お話を伺ったご婦人は言われた。この新館では、「セルフサービス」志向の強い図書館になっていたのだ。子どもも例外ではない。図書館員と利用者や子どもとの接触が少なくなる方法である。意図した運営方針だ。図書館自身か、上部組織の方針、設計・コンサルタント社の発案かわからない。簡潔に述べると、以下のようだ。

1. 本の利用、初登録は、まず自分で仮登録入力。その後、窓口へ。当然、端末機使用未熟者や幼児、扱えない人は誰かに仮登録をしてもらおう。
2. 貸出は館内に複数ある自動貸出機。本と利用券を使い返却期限紙を受取って終わる。予約本も同じ。最近増えた取り置きコーナーから自分で取り出すのである。
3. 返却は、館内外に6, 7か所ある、比較的大きな返却箱へ投入する。
4. 係員・図書館員は定期的に図書を台車で回収し作業場で処理をする。
‘貸・返’時に、図書館員は利用者と対面しない。フロアワークは行われていると思われるが、開館後の賑わいと広い開架室で、それらしき様子は見受けられず。
5. 特定の読みたい本がある場合は、自分で検索機を操作して検索する。本の所在地が印字できるので、それを持って広い開架を探しに行く。小学校高学年くらいからでないとなかなか使いこなせない。先の女の子は子ども室でこれができるようになっていたのだ。
6. 特定の本ではない場合、広い開架空間のどこにどんな分野の本があるか、何がどこにあるか、空間配置案内を探し、配架図を探すことから始める必要がある。開架室の外のブックリウムは、特定の本をさがすにはさほど役に立たない。ブックリウムは、立体空間に投影する機器であって、図書の探索のツールとしての機能はまだ弱い。
7. 予約という方法があるが、この図書館では、今書架にある資料は予約できない。予約して、「次に来た時には、あれを借りよう」と取り置きしておくことはできない。だから、一般利用者はまず探す分野が館内のどこら辺か探す。つまり、端末機操作と検索シ

システムの知識が必須だ。当然、困難な人がいる。端末機は複数台あるが、混みあったらカウンターと同じ、待たねばならない。セルフステーションでなんとか紙まで打ち出した。その後、本まで行き着けない人に、複数出会った。こどもエリアはフロアワークがある。飛沫防止の衝立があるカウンターに委託職員が配置されている。正職員はここには出ない、と聞いた。

でも、先ほどのような小学生もいるにはいるのだと、改めて驚いた。この実例で、利用を続けていけば習熟するのだ、と言ってよいのか…。

8. 必要な本が所蔵していない場合は、たいていの図書館ではリクエストができる。

だが、読みたい本が所蔵していなくても、図書館の用紙で提出することはできる。提出すると受け付けてもらえる。そのとき「図書館に入れる、入れないは、図書館で検討します」と応答がある。あとは返事待ちである。

「もうあなたとは会えないと思っていた」、「こんなところで出会えたなんて」、「私は早くに金沢を出たから」、「〇〇でよく遊んだね」と、80代の女性二人が、幼なじみの奇遇に驚いておられた。期せずして、同じように「おそらく今日が最後と思うから…」と、図書館前のバス停で声を交わしておられた。ひとりが杖に寄りかかりながら。

図書館は、施設、資料、運営、活動、予算、人、で機能している。新しい図書館ができた。本がたくさんあり読む本に困らない。幼児連れも、子どもも、だれでもいつでも行ける。いこいもくつろぎもできて、お喋りも、調べ学習も勉強もできる。飲物も飲めて、集まりやグループ活動もできる。稀には珍しい出会いもある。バリアフリーで老若男女の県民が末永く利用できる。その仕事は誰が担うのか。

News Letter no.30 ニュース・レター

編集:鹿野詩乃、高橋樹一郎

発行者:島 弘

発行:日本図書館協会児童青少年委員会

日本図書館協会児童青少年委員会事務局 川下美佐子

Tel.03-3523-0816/Fax.03-3523-0841

E-mail: jidou@jla.or.jp